

■ 研究論文

古市古墳群周辺における古代の状況について

新開義夫

要 旨

古市古墳群築造の終焉後、当該地域では6世紀末から7世紀初頭ごろ、古代に続く集落関連施設が認められるようになる。その前後の古市大溝の開削に際し、いくつかの小形古墳を損壊している。集落関連施設は8世紀代には、墳丘長100mを超える前方後円墳に近接する場所にまで範囲が広がる。そのような中で、埴輪を井戸枠や流水管として転用する事例が認められる。また、掘立柱建物群が整然と立ち並ぶ場所については官衙風配置をとる建物群との指摘もなされている。ところが、当該地域では8世紀後半以降に粘土採掘を目的とした多くの土壌が掘削されるようになり、近辺で土師器生産が行われた可能性を考えた。やがて土壌の掘削は前代に建物や道のあった場所にまで及ぶようになる。これらから、6世紀末から8世紀代にかけての古墳に対する人々の認識の変化と、8世紀後半以降の当該地域社会の新たな動きといった、2つの社会状況の変化が考えられる。

キーワード：古市古墳群、古代集落、古市大溝、掘立柱建物、粘土採掘、土壌

はじめに

古市古墳群は、藤井寺市と羽曳野市にまたがり、東西、南北とも、ほぼ4kmの範囲内に、130基以上の古墳が築造された¹⁾。その期間は、4世紀後半から6世紀前半にわたる。

古墳が築かれたのは、羽曳野丘陵から派生する段丘上と、その東側の国府台地と呼ばれる段丘上、及び両者の間にある低い段丘上といった、標高の高い場所が主となっていた。

古市古墳群築造の終焉後、6世紀末から7世紀初頭ごろ、当該地域の段丘上を中心に古代に続く集落関連施設が認められるようになる。そして、墳丘長100mを超える前方後円墳に近接する場所にまで、掘立柱建物や井戸、溝などがつくられていく。廣瀬和雄氏は、当該地域のこのような状況を、「古代の開発」と呼んだ（廣瀬 1983b）。

本稿では、現在の藤井寺市域における古市古墳群造営終焉後の古代の状況について、先学の研究成果に導かれつつ、発掘調査の成果から、その概要を述べる。

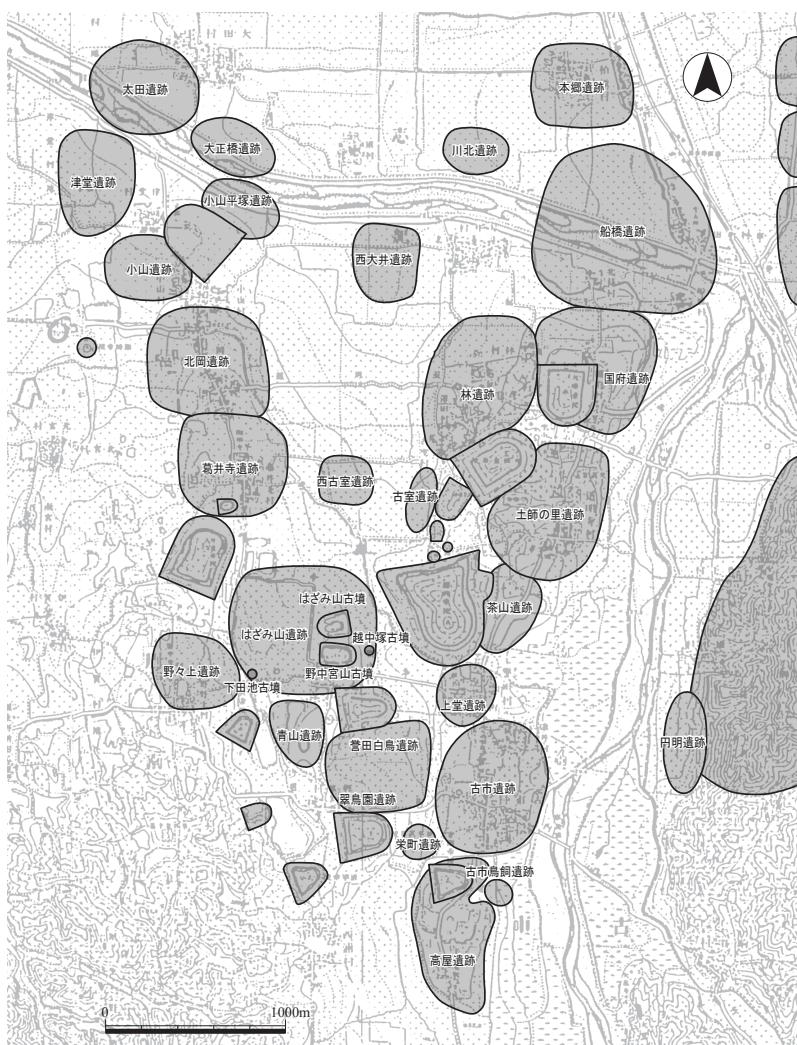


図1 古市古墳群周辺の遺跡分布図（天野 1998一部改変）

1. 古代集落と古市大溝の開削

藤井寺市内における古代に続く集落関連施設は、市の南部、はざみ山遺跡には6世紀末から7世紀初頭に出現すると考えられる（新開 1999）。同遺跡の西側には、古市大溝が存在していた。

古市大溝は、富田林市の河南橋付近からの取水が考えられており、土地の形状や調査成果などから、その流路が想定されている。発掘調査で確認したところでは、検出時の上端幅7.4m、深さは最大で3.9mを測る。大溝の断面形態は、上端から斜めに下降するが、下端から0.4m上のあたりからはやや急な角度に変わって下降する。底は幅2m程度の平坦な面を呈する。

古市大溝築造の際に6世紀代に造られたいくつかの小形古墳を損壊していることが明らかとなっている。

このように損壊された古墳の一つに、下田池古墳がある。下田池古墳は、発掘調査で新たに存在が確認された埋没古墳である。6世紀前半に築造された。墳丘の直径25mの円墳で、幅5m前後の濠がめぐる。この古墳は、古市大溝の築造に際して、濠の西側の一部が損壊された状況が認められる。また、西側の濠の埋土には、周辺の地山と同様の土質のものが認められる部分がある。このことから、古市大溝を掘削した際に、その排土を用いて下田池古墳の濠の一部を埋め戻したことが考えられる（新開 2000・2013）。

古市大溝の築造時期について、広瀬氏は、考古学的成果から、7世紀初頭と位置付けた（広瀬 1983a）。広瀬氏のこの見解は、周辺の発掘調査で確認される遺構との関係からも、妥当な見解であると考えている。

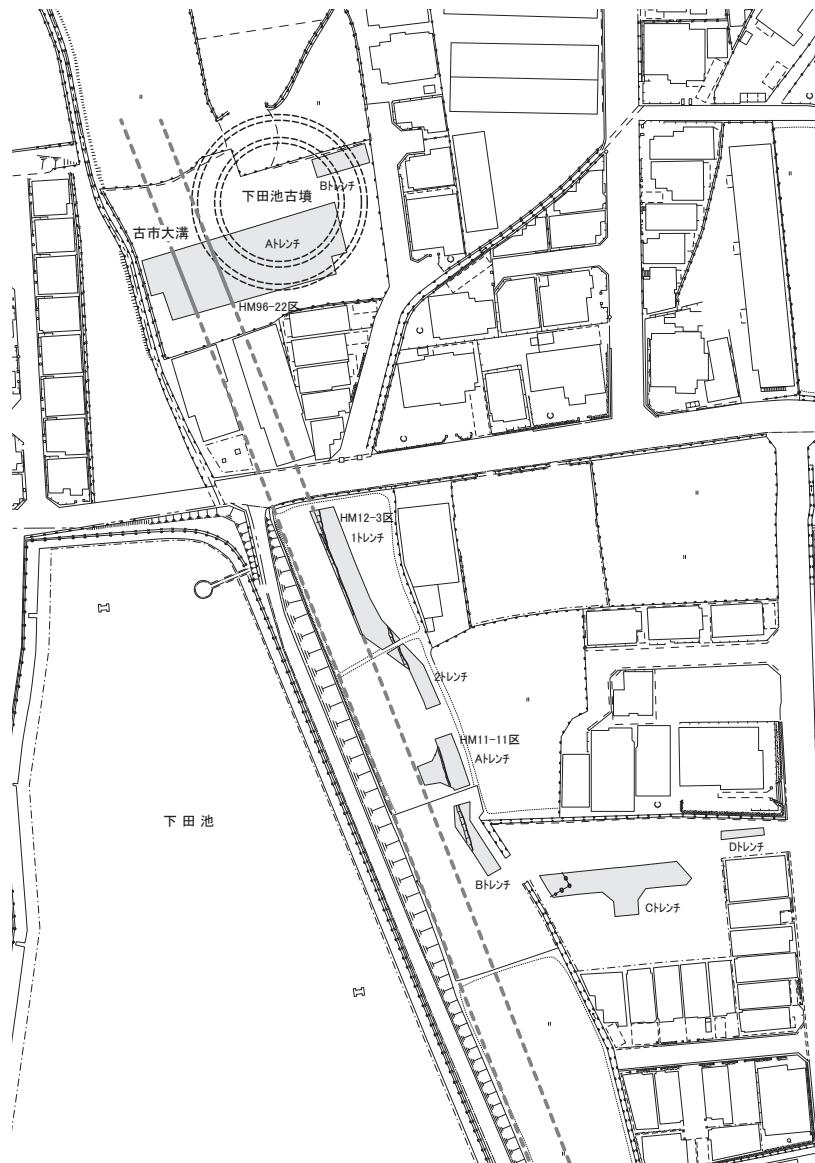


図2 古市大溝と下田池古墳との関係
(S = 1 : 1,500) (新開 2013)

2. 古代集落の広がり

はざみ山遺跡における古市古墳群周辺の古代集落は、その後も範囲が広がっていく様子が発掘調査の成果から明らかとなっている。

墳丘長 103 m の前方後円墳、はざみ山古墳の東側では、8世紀代に古代集落が展開するようになる。同古墳には堤を輪郭づけるための掘り込みが堤の外側に巡るが、それに近接して 8世紀代に集落関連施設がつくられるようになるのである（新開 1995a・1997b・1998・2011）。

また、はざみ山古墳の南側にある墳丘長 154 m の前方後円墳、野中宮山古墳と、その東側に存在した直径

40 m の円墳、越中塚古墳との間でも 8世紀代の掘立柱建物が両古墳に近接した場所につくられている。そして、野中宮山古墳の堤を輪郭づけるための掘り込みの範囲内には、井戸が掘削されている（HM95-5 区 井戸 1）。この井戸 1 は、埋没時期の上限が 8世紀前半で、鰐付き円筒埴輪を井戸枠に転用している。鰐の部分と上部及び下部を打ち欠いた別個のものを約 1 m の高さで 3段に積み重ね、それぞれの接合部分は隙間をふさぐように外側から別の円筒埴輪の破片があてがわれていた。そして、埋め戻す際に多くの土器を井戸枠内に廃棄したような状況が認められた（新開 1997a）。

古代に埴輪を転用したものとしては、他に、埴輪を



図3 はざみ山古墳・野中宮山古墳・越中塚古墳周辺の古代集落 (S = 1 : 1,500) (新開 2011一部改変)

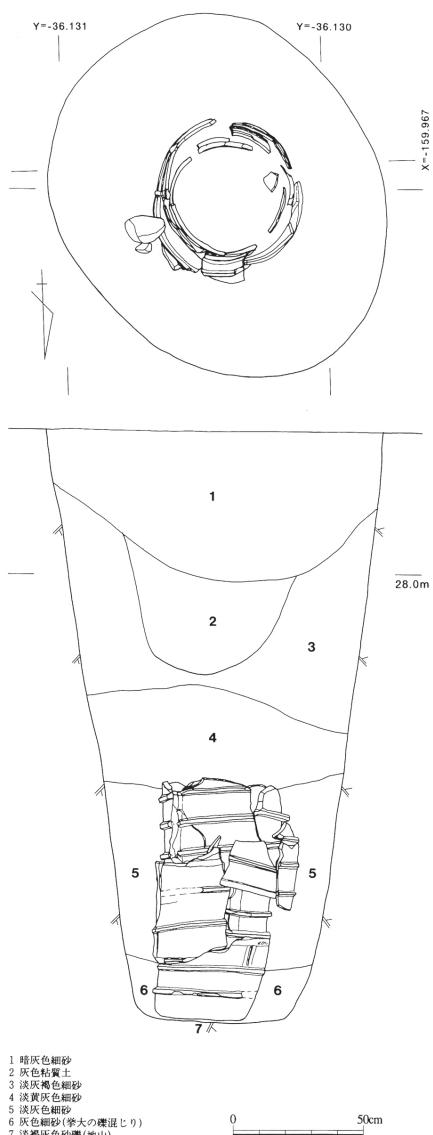


図4 はざみ山遺跡の円筒埴輪を転用した井戸枠
(HM95-5区井戸1) (新開1997a)

連結して土中に埋設し、流水管として使用した事例があげられる。埋設時期の上限は7世紀初頭である(新開1995b)。

一方、近鉄藤井寺駅の北側一帯に広がる北岡遺跡では、7世紀代から掘立柱建物を主とする古代集落がある。これは8世紀代に範囲を広げ、大形を含む掘立柱建物が整然と立ち並ぶ場所については官衙風配置をとる建物群との指摘もある(天野1996)。また、並行して走る二条の溝が発掘調査で確認されており、これを側溝とする道の遺構と考えらえている(中西1994他)。

3. 土壌の掘削

その後も掘立柱建物は確認できるが、北岡遺跡及び南接する葛井寺遺跡では、8世紀後半以降、多くの土

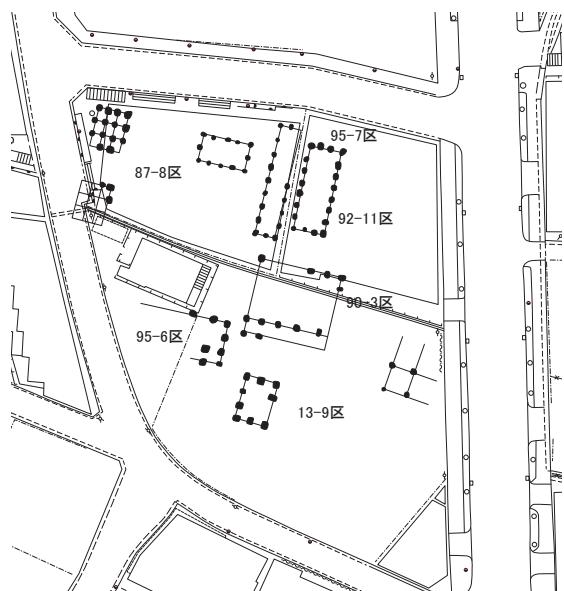


図6 北岡遺跡の掘立柱建物群 (S = 1 : 1,000)
(新開2015一部改変)

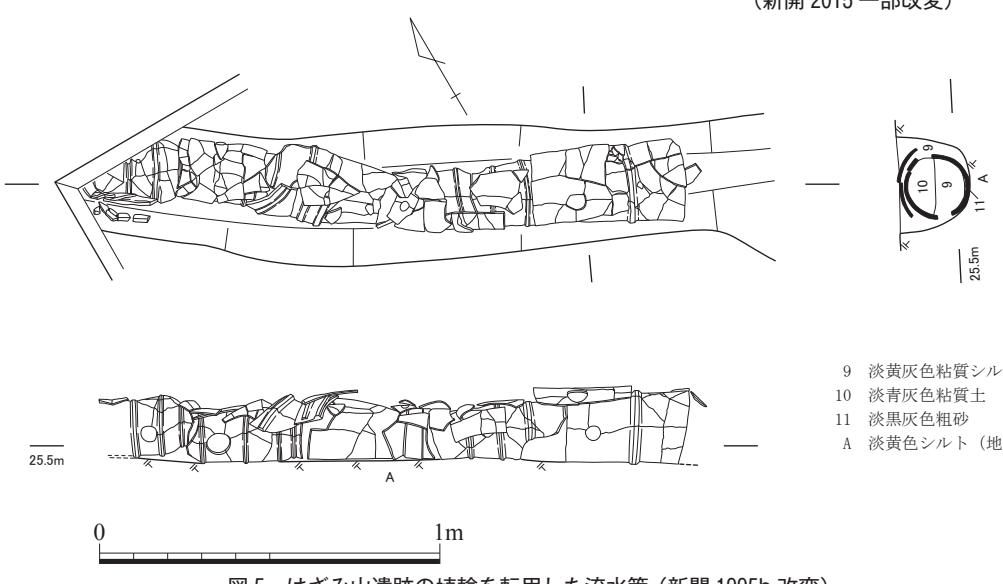


図5 はざみ山遺跡の埴輪を転用した流水管 (新開1995b 改変)

壙が掘削されるようになる（新開 1994 他）。

この土壙は平面形態が不整形であり、掘削場所及び深さが粘土層の存在する範囲であること、粘土層の壁面をえぐるようにフラスコ形の断面を呈するものがあることなどから、粘土採掘を目的として掘削された土壙であると考えられている（天野 1988）。埋め戻しに

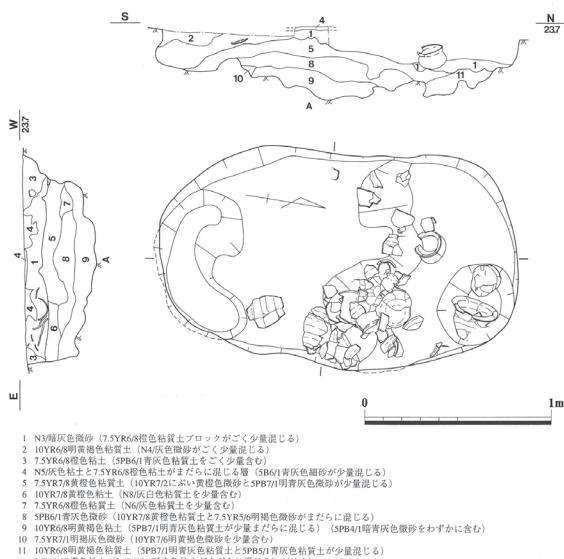


図 7 北岡遺跡の土壙の遺物出土状況（新開 2008）



図 8 北岡遺跡の土壙に埋められた土師器と、灰と思われる堆積（新開 2008、藤井寺市教育委員会）

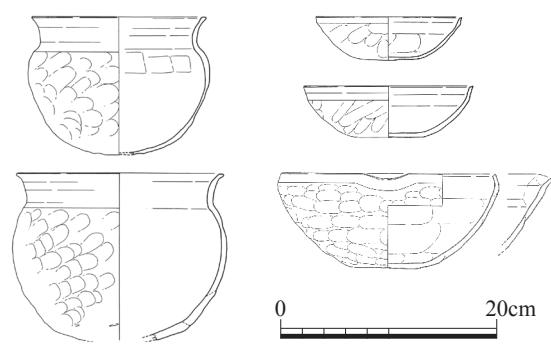


図 9 北岡遺跡の土壙出土の土師器（新開 2008 より作成）

際しては多くの土師器と一緒に埋めているものがある。埋められた土師器は、甕、杯などがあり、当該地域に特徴的な土師器で構成されている（新開 1996・2003）。ほぼ完形のものが埋められる場合、破片を主として埋められる場合、ほとんど何も埋められない場合といったように、土壙により違いがある。また、土壙がある程度埋没した後に、埋められた土師器とともに灰と思われる堆積の認められるものがある（新開 2008）。

先に述べたように土壙は粘土採掘を目的としたものであると考えられるが、当該地域に特徴的な多くの土師器が一緒に埋め戻されているものがあり、埋土中に灰と思われる堆積がみとめられるものがあることから、採掘した粘土は土師器を生産するためのもので、近辺で土師器を制作、焼成した可能性が高いと考えている。何らかの理由で使用されなかったものが灰とともに埋め戻されたのであろう。

ところで、土壙が掘削された範囲は、北岡遺跡で 8 世紀代に掘立柱建物が存在し、道があった場所にまで及んでいる（天野 1988、泉本 1985、一瀬 1987、新開 1994）。つまり、前代に建物や道のあった場所までも粘土の採掘に適しておれば土壙を掘削していったことになるのである。

おわりに

以上、藤井寺市域における古市古墳群造営終焉後の古代の状況について、概要を述べた。以下に、まとめを行う。

①藤井寺市域の古代に続く集落関連施設は、はざみ山遺跡では 6 世紀末から 7 世紀初頭に出現すると考えられ、その前後に古市大溝が開削される。古市大溝開削に際して、いくつかの古墳を損壊している。

②その後、はざみ山遺跡の古代集落は範囲を広げ、はざみ山古墳、野中宮山古墳、越中塚古墳などのそばまで、集落関連施設がつくられる。そのような中で、埴輪が井戸枠や流水管といったものに転用されるようになる。

③北岡遺跡では、8 世紀代に大形を含む掘立柱建物が整然と立ち並び官衙風配置をとる建物群と指摘されるものも現れる。また、道の遺構と考えられるものも認められる。

④北岡遺跡、葛井寺遺跡では、8 世紀後半以降、粘土採掘を目的とした多くの土壙が掘削される。そして、近辺で土師器生産が行われていた可能性を考えた。このような土壙は、③の掘立柱建物や道の遺構の範囲にまで掘削されるようになる。

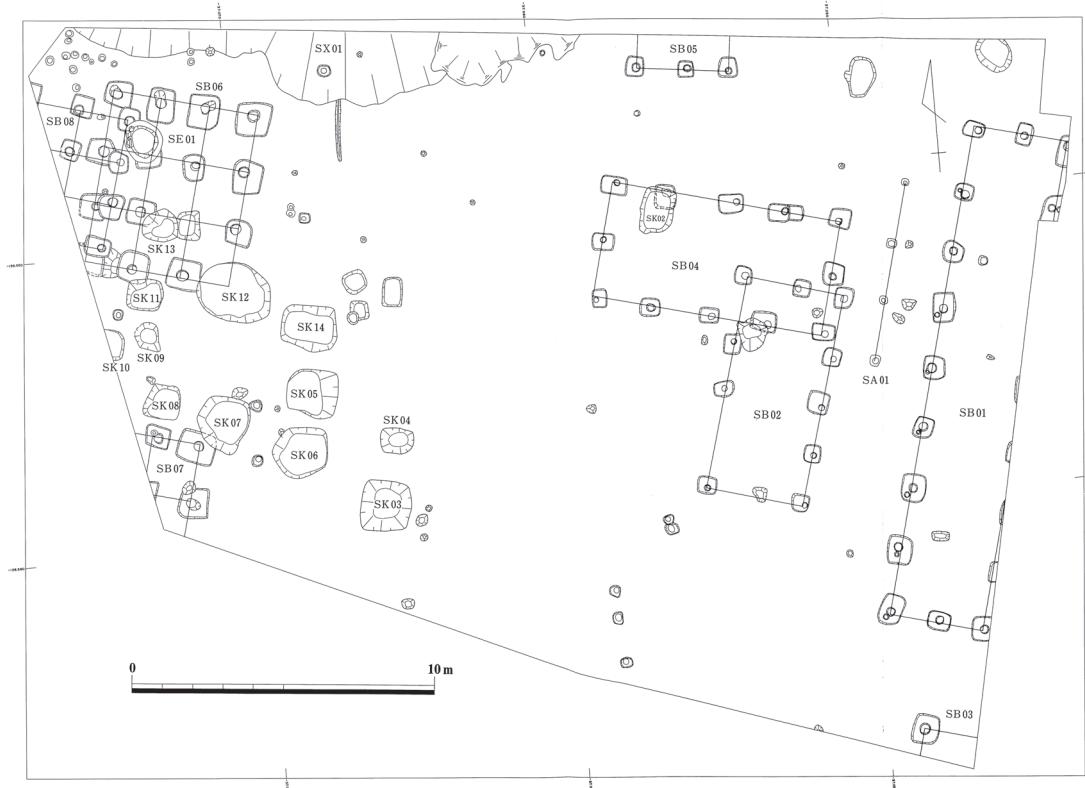


図 10 北岡遺跡の掘立柱建物と土壙との関係（天野 1988）



図 11 北岡遺跡の道と土壙との関係（新開 1994）

以上、①②における、古市大溝開削による小形古墳の損壊、墳丘長 100 m を超える前方後円墳に近接する場所での集落関連施設の設置、本来の目的とは異なる埴輪の転用といったことは、古墳に対する人々の認識の変化を表していると考えられる。

また、③④のように、8世紀後半以降、前代の集落関連施設や道の遺構の範囲にまで粘土採掘が及ぶということについては、当該地域社会の新たな動きと考えることができる。

〈注〉

- 古市古墳群は、2024（令和6）年12月末現在、131基の古墳が確認されている。内訳は、前方後円墳23基、帆立貝形墳7基、方墳52基、円墳39基、墳形不明10基である。この内、45基が墳丘を地上にとどめている。

〈参考文献〉

- 天野末喜 1988 「Ⅲ 北岡遺跡の調査 8区」『石川流域遺跡群発掘調査報告Ⅲ』藤井寺市教育委員会
天野末喜 1996 「第2章 北岡遺跡の諸問題 1 北岡・葛井寺地域における古代集落の変遷」『北岡遺跡』藤井寺市教育委員会

泉本知秀 1985 「北岡 84-1 区」『北岡遺跡発掘調査概要』大阪府教育委員会

一瀬和夫 1987 「北岡 86-1 区」『はざみ山、土師の里遺跡他発掘調査概要・昭和 61 年度』大阪府教育委員会

大阪府教育委員会 1983 「82-3 区」『昭和 57 年度 はざみ山遺跡発掘調査概要』

大阪府教育委員会 1985 「84-2 区」『はざみ山遺跡発掘調査概要 大阪府文化財調査概要 1984 年度』

佐々木理 2003 「第 5 章 はざみ山遺跡の調査 2. HM00-9 区」『石川流域遺跡群発掘調査報告 X VII』藤井寺市教育委員会

新開義夫 1993 「XI 越中塚古墳の調査 1 区」『石川流域遺跡群発掘調査報告 VIII』藤井寺市教育委員会

新開義夫 1994 「II 北岡遺跡の調査 92-7 区」『石川流域遺跡群発掘調査報告 IX』藤井寺市教育委員会

新開義夫 1995a 「VI はざみ山遺跡の調査 93-9 区」『石川流域遺跡群発掘調査報告 X』藤井寺市教育委員会

新開義夫 1995b 「VI はざみ山遺跡の調査 93-32 区」『石川流域遺跡群発掘調査報告 X』藤井寺市教育委員会

新開義夫 1996 「第 2 章 北岡遺跡の諸問題 3 葛井寺地域の古代土師器甕に関する予察」『北岡遺跡』藤井寺市教育委員会

新開義夫 1997a 「第 6 章 はざみ山遺跡の調査 1. HM95-5 区」『石川流域遺跡群発掘調査報告 XII』藤井寺市教育委員会

新開義夫 1997b 「第 6 章 はざみ山遺跡の調査 5. HM95-16 区」『石川流域遺跡群発掘調査報告 XII』藤井寺市教育委員会

新開義夫 1998 「第 6 章 はざみ山遺跡・墓山古墳・

野中宮山古墳の調査 1. HM96-16 区」『石川流域遺跡群発掘調査報告 X III』藤井寺市教育委員会

新開義夫 1999 「第 4 章 はざみ山遺跡の調査 1. HM97-22 · 98-6 区」『石川流域遺跡群発掘調査報告 X IV』藤井寺市教育委員会

新開義夫 2000 「第 5 章 はざみ山遺跡の調査 1. HM96-22 区」『石川流域遺跡群発掘調査報告 X V』藤井寺市教育委員会

新開義夫 2003 「古代の藤井寺地域における土師器甕について」『家根祥多さん追悼論集 立命館大学考古学論集 III』立命館大学考古学論集刊行会編

新開義夫 2008 「第 2 章 北岡遺跡の調査 1. KT03-13 区」『石川流域遺跡群発掘調査報告 X X III』藤井寺市教育委員会

新開義夫 2013 「はざみ山遺跡・古市大溝 (HM2011-11 · 2012-3 区)」『藤井寺市発掘調査概報 第 12 号』藤井寺市教育委員会

新開義夫 2015 「北岡遺跡 (KT2013-9 区)」『藤井寺市発掘調査概報 第 27 号』藤井寺市教育委員会

中西康裕 1993 「IV はざみ山遺跡の調査 5 区」『石川流域遺跡群発掘調査報告 VIII』藤井寺市教育委員会

中西康裕 1994 「II 北岡遺跡の調査 92-11 区」『石川流域遺跡群発掘調査報告 IX』藤井寺市教育委員会

山田幸弘 1989 「IV はざみ山遺跡の調査 8 区」『石川流域遺跡群発掘調査報告 IV』藤井寺市教育委員会

山田幸弘 1994 「IV はざみ山遺跡の調査 10 区」『石川流域遺跡群発掘調査報告 IX』藤井寺市教育委員会

広瀬和雄 1983a 「河内古市大溝の年代とその意義 — 古代における開発の一形態」『考古学研究 第 29 卷 第 4 号』考古学研究会

広瀬和雄 1983b 「古代の開発」『考古学研究 第 30 卷 第 2 号』考古学研究会

